

黄色い薔が風に揺れて

—三重大の思い出—

山 神 徳 子

入学の頃

一枚の色あせた集合写真、上の左端に小さく私の姿も。昭和廿七年（一九五二）三重大大学の入学式に撮ったもので男子は全員、黒の学生帽に黒い学生服。女子も黒のスーツ。その中で私一人がグレーのスーツで写っている。細かな縦縞の入った灰色の父の和服を、母が仕立て直して下さった物。出来てきた写真を見て、母は「矢張り、地味だったね」と一言。天然呆けの私は別に何とも感じていなかったから初めて地味な服装かしらと思った。全然、気にするどころか、母の愛情をしみじみ嬉しく感じてい

た。

父は、志摩の相差から津まで通学は出来ないし、下宿はお金がかかると考え、神島の校長としての栄転を辞し、伊勢市への転勤を希望した。うまく伊勢市の豊浜中学へ転勤できたのだが、住居がみつからない。やむなく学校の宿直室に父と私は住む事になった。母は、転居先が決まる迄、教員をしている兄とそのまま相差の教員住宅で暮らしていた。私は校長住宅に住む橋本有^{あり}ちゃんと毎日、小俣の近鉄駅へと田舎道を二十分歩いて電車通学を二カ月続けた。やっと小俣町の新出に借家が見つかり、親子三人の生活が始まったのは六月初めのことだった。

入学式当日

高校で寄宿生活を共にした気の合うノキさん（大野木^{ミチ}方子）と、二人は行動を共にしていた。受験の二日間、旅館で相部屋だった静岡の良子さんを捜したが見つからない。あんなに素敵な文字で学習カードを作っていたのに、受からなかったのかと気の毒に思った。一方、受験の日、ひときわ顔色が黒ずんで老けている小柄な人を見て、「あんな子も来ているわ、受かるかしら」と囁いて変な安心感を抱いた。その人が合格していた。しかも数学専攻とか、ええっ、人は見かけによらないものだと、

浅薄な我が不明を恥じた。

指導教官のこと

数日後だったか、指導教官が発表された。学級担任のようなものらしい。W先生の指定の教室に入ると大勢の人が集まっている。山女（宇治山田高等女学校）の一、二年の時、同クラスにいた奥村美保ちゃんや伊東の幸ちゃんなど知った顔もあった。伊勢周辺の人の集まりらしい。そのうち、背は低目だが、高級な背広を着こなし紳士が現われた。その指導教官は「これからは皆さんの相談役として」と挨拶され、近くの席の子に親の職業を尋ねたりする。なんとなく物の言い方が気に食わない。すぐ誰か外の先生に変更しようと生意気にも思った。ノキさんは下宿が決まっています別組に行っているから相談する相手もない。頭に浮かんだのは、国語の入試の時、試験監督に見えた漢文の先生の顔だ。大きな体軀、茫洋とした顔、ゆったりと説明される声、あの先生に頼んでみようと、私はさっそく荒井先生の教官室に赴いた。先生は「私は経験がないんだけどね、それでよかったら」と即座に承知して下さった。さっそく母と津の荒井先生の御自宅にご挨拶に行った。先生は玄関に立ったまま「こちらこそよろしく」と答えるのみ。少し物足りなく感じ

ながら母と辞居した。それ以後、何の指導も話すこともなく過ぎた。わずらわしい事もなく私にとってはよかったと思っている。一方、美保ちゃん達の話によると、彼女たちはW先生の大きな屋敷に招かれ、先輩にも紹介され、大学生活のアドバイスを受けた由、兼行法師の「先達はあらまほしけれ」の一節がチラツと浮かんだ。

一般教養の選択をして

一年生、前期の時間割を組む際に考えたことは、高校の時、苦手で避けてきた理系の天文学、地学、化学を選択しようと思面目に選んだのだが、矢張り興味のない科目は、全く頭に入らない、授業も砂をかむ思いで面白くない。期末テストも四苦八苦、六十点とれなければ単位を落とす。不安だった。結果の成績表は、意外にも7、8点もらえてほっとした。よかった事は一つ、理科室を覗くとテレビが映っていて理系の人達が実験していた。見せてもらって説明もしてもらったがわからなかった。当時は一般にテレビは普及していない時代である。めずらしかった。

期末テスト中、山高（宇治山田高等学校）から来ている女の子の誰にも出会わない日があって不思議に思っていた。後日、話を聞くと、彼女達は教養科目は、得意な

分野を選択し、わざと欠席して追試を受けたそうである。そんな事、誰から教えてもらったのだろうと頭の片隅で思った。よい得点、よい成績表、よりよい就職先へとつながるらしい。えーとびくりした。私は教養の幅を広げようと苦手な科目をとり、結局身につかなかったのだから、馬鹿なことをした事になる。それにしても、追試の手段はどうかと思った。

「葉っぱ」のグループ

国語と美術の二科目を専攻した人は、必須科目の授業は自ずと同じになり、受講の顔ぶれも決まってくる。いっしか亀山の種生登志子さん、一志郡の久保高子さん、奥野剛正^{たけまさ}さんと親しくなっていた。阿山郡の菊森由怡子^{ゆいこ}さんは家庭科と美術専攻で、美術のデッサン、絵画、色彩学、彫塑、木工の授業で親しくなった。志摩の浜島の大野木方子^{なち}さんは、家庭科と社会科専攻だったが、控室で私といつも一緒だったから仲間になっていったと思っていたら種生さんと知り合ったのが縁で入ったとの事。奥野さんの友人の福本一臣^{かずおみ}さん、前田暁^{あきら}さん、大森さんも加わっていつの間にか、気の合うグループが誕生した。

奥野さんの発案で、同人誌を作る事になった。下級生

やその他の人も加わって手製の薄い同人誌「葉っぱ」を発行。私も散文や詩をのせた。私達の会より前から上級生の渡辺正也さんのグループは、活版印刷の「サボテン」を発行していた。サボテンの中の一人、福森さんだったか、名前は忘れたが、急に私の受けている国語概論の授業に現われ隣席に坐わるようになった。いつも何か詩を書いている。ある日、私の机の上に「読んでみる？」と一枚の用紙を置いた。すぐく乱雑な金釘流なので「読めないわ、もつときちゃんと書いて下さい」と返した。彼は、すぐ丁寧に書き直して私の前に寄こした。前と全く同じ書体だった。私は黙って読んでみた。シュールな詩で、古代都市ニネベのなんとか、心象風景の詩らしい。ニネベの文字だけが印象に残った。そのうち教室に来なくなった。美術の奥行彦さんの友人だったのか、「サボテン」の勧誘だったのかよく分からない人だった。

久保さんや種生さんが学生援助資金と月謝免除を受けていると聞いたので、ノキさんと事務所に手続きの書類をもらいに行った。学生援助は、義務教育の小、中学校に借りた年の倍の年数勤務すれば返金しなくてよい制度で、これは助かると手続きをした。お蔭で、通学のパス代、お昼のパン代、本代等それで賄う事が出来て嬉しかった。

た。月謝免除は父親がいらない人に適用されるから、父親のある人は駄目だと事務の女性から言われた。久保さん、種ちゃん^{たねちゃん}は母親だけなのだとわかったのはその時だった。

美術の授業と先生

絵画とデッサンの講座は足代義郎先生だったが、先生は余り来られなかった。子供の時から足代先生の画塾に入っていた奥行彦さんが、伝達や出席係をしていた。慣れていた私たちは絵画の授業の前に黒板に氏名と写生と書いて、教室から校外の町に出かけた。自由な雰囲気を楽しかった。色彩学の園田先生、木工技術の木村先生の授業は気が抜けなかった。木工、金工は苦手で、助手の服部さんには手伝ってもらい随分助けていただいたものである。

絵画の前に国語の授業があった。その古文を教えて下さるA先生はお年を召しておられるように見えた。古文の解釈、鑑賞をなさる時、その主人公の心情と一体化し、窓辺に歩みながら、恍惚とした顔や手振りで語られる様は、先生がいかに内容を深く理解し、心酔されているかが感じられ、私もその作品のよさを理解できたように思う。でも早く絵画制作をしたい私は、時々、後の出口近

くに予め坐席を取り、隙をみてそっと抜け出した。うまく抜けられたと思っていた。しかし自分が教師になり教壇に立ってみると、生徒の一挙手一投足が手にとるように見える。あのA先生にばれていない筈はない。温厚な先生に誠に失礼な事をして、すまないと思っている。

小学校五、六年、中学二、三年生の学級担任に恵まれなかった私は、高校では、つまらない事にこだわらない包容力のある先生が多くおられたと感じていた。大学の先生は風格があり、人間的に秀れた考え方が出来る方が少なくないように思えた。A先生も荒井先生もそのうちの一人と言える。そんな先生方に自分も近付きたいと思っていた。

デッサンの授業

デッサンの授業では、事前にビーナスやダビデなどの半身像が置かれていて、それを中心に学生がとり巻く。イーゼルを使うので、場所をとられて狭くなる。早く行って構図的によい場所をとらなければ悲惨である。私は像の顔が七割ほど見えて、画面にバランスよく大きく入る位置を確保する事になっていた。

遅く来ると、像の真横とか背面しか見えない場所しか空いていない。この時もう作品の出来は殆んど勝負がつ

いていると言える。

デッサンの時、デッサン用の木炭で描くので、消しゴムので代りに食パンを使う。忘れてパンを用意していない時は、お互い貸し借りをする事もある。時には他人の気がなるのか見に来る人もいる。名前は知らなくても、大体顔見知りになる。私も疲れて集中できない時、見て回る。

この講座は一つしかないのです、一年から四年生まで一緒だし、小学校課程の人も小学校の免許状と専攻科目を一つ選べるので、美術を専攻する人が混っている。また小学校課程の人は、国語、数学、理科とか音楽、美術など九科目の単位をとる必要があつて、デッサンの講座を取りに来ている場合もある。美術が得意でない人も交っているわけだから、ひどい作品を描いている人もいます。私はお節介やきな所があるので、小声で頭が出過ぎていくとか、首のひねりの角度が不自然とか指摘する。そうすると初めて気付いて喜んでくれる。

期末になるとデッサンの作品を提出した。奥さんは、採点の助手をしたのだろう。私に「デッサン10点は四年の前田君とあなたの二人しかおらんだよ」と教えてくれた。前田さんはデッサン力のある寡黙ながっちりした人

で、その人と一緒の点がもらえた事は非常に嬉しかった。

絵画の採点風景

期末には自作の一点を持って足代先生の前に一人ずつ立つ。その作品を足代先生は長めの白髪まじりの髪の毛に触れながら、眼光鋭くじつとみる。そして、6とか8とか評価点をつけていく。横に立つ奥さんが名簿へ点数を書き込んでいく。

奥野剛正さんは文学に熱中していて、普段絵を描いている様子はなかった。彼は四つ切りの画用紙に前日水彩の風景を描いたいかにも手抜き作品を平然と持つて立つ。気になって見ていたが及第点をもらえてほっとした。私は夏休みに波切に行つて燈台をスケッチしたり、油絵で燈台を描いていた。種生さんは20号の油絵で、私の絵と同じ構図の作品を描いて出しているのに驚いた。現場に行かないのに燈台の下に広がる荒波、白いしぶきをうまく表現しているので感心した。彼女は器用にその場を処理する才能があるのだろうか。

「葉っぱ」の仲間たち

私達は、昔の三重大の道を挟んで城の堀にある県立図書館に毎日のように遊びに行っていた。それで館長の中野イツさんとも親しくなっていた。ある時、三重テレビ

の放送局が出来た頃だったと思うが「若い人の出演を頼まれたので、あなた等^ち出てくれないかしら」と頼まれた。いよいよ放送の日、中野さんと私たち五人がテレビ局に出向いた。私は初めてのテレビカメラの前で緊張していた。内容は忘れたが多分「これからの若い女の人の生き方」といったテーマだったと思う。なんの打ち合わせも、リハーサルもなく、ぶっつけ本番だった。

中野さんが冒頭、いきなり私にどう思いますかと話題を振って来た。なんで私なのよと頭は真白状態、言葉が出ない。すると種生さんが、すらすらと、しっかりした意見を述べてくれて助かった。後は無難に過ぎていったが、私はずっとほんやりしていた気がする。

ノキさんが「私達の中で一番種生さん（現、斉藤）が頭がいいと思うよ」と言ったのも合点がいく。私は受けた覚えがないが、二回、全国の実力テストを種ちゃんとノキさんは受けたそう。種生さんはその二回とも三重県でトップの成績だったそうである。ノキさんは種ちゃんと下宿が近く、通学の道が同じで、家庭教師のアルバイト等、共通の話題があつて気が合うのか、いかにも楽しそうに議論を飽きずにやっていた。種ちゃんの「一寸、待った」「それがですねー」と右手を前に出す仕種が今

も目に浮かぶ…。

二部乙類（二年制中学課程）は、私達の入学の年、十三倍の競争率と新聞に報じられていた。事実、優秀な人が集つたと思う。

奥野さんも津高校で数学がよく出来る人で誰もが東大にいくと思つていたと女の子が言うのを聞いた事があつた。彼は英語を専攻したかったが、耳が悪いので断念したとか、読書、一日三冊読破している、すぐ読んでは古本屋に売り、新刊を買うとか、本人に聞いた事はないが、噂は本当のように思える。彼は満州から引揚げてきてお母さんや弟妹を結核でなくしている。彼は熱血教師で仕事にのめり込むと病気になる休職した事もあつた。小説家を目指し転職したり悩んだ末、四十を過ぎると退職をし、背水を敷き、小説家になろうとした。名古屋の同人誌「北斗」に所属して、清水信氏の事を話していた。ノキさん宅に同人誌を置きによく来たらしいが、私は余り彼の作品を見ていない。しかし、どうも目が出なかつたようである。

彼は小説より論評に向いている気がする。彼の才気に、経済の余裕、強い身体、奥さんの理解があれば、もっと才能を開花できたのではと惜しむ事しきりである。

福本さんは、要領のよい話し方をする穏健な人柄の人だと思った。彼が津の三重大附属中の教員をしていた頃、偶然にも、私のいとこの節ちゃんの息子（現、三重大の医師、佐久間肇）のクラス担任をしていたと聞いた。福本さんが退職時小学校の校長で、玄関前に記念の子供の像を建てたいと依頼しに秦さん（前、菊森由怡子）宅に came。ちょうど私も居合わせた時だった。後に、彼女はその子供の像を制作し、学校に建立された。縁はあるものだと思う。

前田曉さんは、奥野さんとは晩年に至るまで行き来している仲だが、私は同窓会以外、会う事はなかった。高校の教員だったがいとも落ちついた温厚な人だと思っている。

大森さんは、グループでも私は話すことはなかった。奥野さんの友人という印象しかない。

種ちゃんは、亀山附属中出身で確かに雄弁で頭の回転が早い。東大阪で教員になったが、長く組合活動をし、婦人部の支部長、委員長として萃々しく活動をし、退職時は中学校校長で終っている。私達の時は、家庭との両立は困難で、男尊女卑の考えも根強かったから、小学校の校長になる人もまれで、中学校校長にはなれなかった。

彼女が中学校校長になった事は凄いいことと言える。彼女から教職人生を綴った本が送られてきた。彼女らしい内容だと思った。現在の小、中学校では、女の先生がずんで管理職を望む人が多いと聞く。まだ男社会であるから大変だろうけど声援を送りたい。

菊森さん（泰由怡子）は根はしっかりしているが落ちついた小聲で話すタイプで、一見おとなしく見えた。彼女は菰野町で七十七才の定年までの十八年間、保護司の仕事の続け、法務省から表彰されている。また平成23年45回日展の彫塑の部で特選の栄に輝き、その作品が、フランスのユネスコ本部で「アートを通して平和な世界を」のテーマに最もふさわしい作品として選ばれ、作品「さわやかな遊歩道」の写真が大版のポスターカレンダーになった。国際博覧会でも好評で、沢山の人々がそのポスターを買い求めたそうで、友人として実に喜ばしい。今、私の家の玄関の壁にも、そのポスターがある。

八十才を過ぎても現役で大作の彫塑制作に挑む力は、あの小柄な身体からは想像できない。

久保さん（高藤高子）は私が経験した事がない悲しみ、苦勞の連続にもかかわらず愚痴一つ言わない強さ、明るさ。他人の為には利害を考えず動いてくれる。私には真

似できない。現在も無償で書道を教えている。今は、大人も入れて六十人ほどに増え、土、日だけでは出来なくて毎日教えている。その上、依頼されて五カ所の公民館へ毛糸の手編み教室の先生として三十年活動を続けている。

ノキさん（田中方子）は、80才の去年（平成26年）、彼女の生き甲斐だった茶道の先生をやめたが、両眼失明に近い身で、今も「赤とんぼ」童謡を歌う会、読書会「あいあい」の例会を自宅で続けている。その気力に頭が下る思いがする。

私は何をして来たのだろうか？中学校教員と、家庭との両立に精いっぱいがんばったつもりでも、成果は見えない。当たり前前の事をしてきたに過ぎないのでは？子育ては失敗——全力をつくした結果が——どうしようもないではすまされない。まだ人生の結着はついていない。残りの人生で少しでもよい結果を作りたいと思っている。嘆いても何も変わらない。前を向いて進むしかない……。

美術クラブでの思い出

ある日、いつものように久保さん、菊森さんと賑やかにおしゃべりしながら、美術室に直接入れる階段を上っ

ていった。扉の中から大音声の罵声が耳に飛びこんで来た。入ろうとすると、入口近くに奥行彦が普段でも大きな目を更にかつと見開いて鬼のような形相で立っていた。何を怒っているのか「お前ら来んでもいい、来るな」と叫んで迫ってくる。勢に押されて私達は階段を駆け降りた。上から「来るな！」とまだ叫んでいる。「あれ何なの」とあきれた。召集をかけたのを知らなかったのだろうか、とにかく酷いとだんだん腹が立ってきてしょうがない。授業以外、立ち寄らない事にした。それでも彼と廊下や校庭で出会う事がある。来たと思うと擦れ違っていくまで目を離さず、無言で眼を食い入るようにぐつと睨みつけてやった。一カ月を過ぎた頃、彼の友人が「悪かった。謝まる。もう、睨まんでくれ」との伝言をもつてきた。それから、また放課後も行くようになった。

二年生になって書道クラブと合同の美術展をする事になった。私も小俣のユニチカ工場を描いた20号の油絵を出した。開催初日さっそく観に行った。奥さんのダリを思わずシュールな50号の作品が目をひいた。後年の一面、黒一色の作品と違って多彩で美しい。テーマを考えるより、実に薄く器用にぬっている事に感心した。その作品

は、秋の県美術展（県展）で特選の賞に入った。余り交流がない岩ちゃん（岩本）や伊藤君、森田君数人の作品も、私よりはよい出来だと思った。音楽専攻の男子は身なりも整えた気取った人が多い気がしたが、彼ら美術部の連中はまるで違っていた。彼らは個性が強く、セザンヌの構図論や、立体派のピカソやシュールレアリズムを熱く語っていた。時に一晚飲み明かしたのか、デカダンぶって美術室に奇声を上げて入って来た事もあった。裸子でルンペンのような汚れて破れた毛布をまとっている者もいた。彼らもそれなりに青春していたのだろう。私は彼らから聞きかじったセザンヌやピカソの本を買って、立体派的風景画や、三角形の構図を用いた林の風景画を20号の油絵で描いてみたりした。しよせん猿真似で、私には身につかなかった。才能がなかった。

加納誠子^{マコ}さんも美術部だった。私の住む小俣町と彼女の住む玉城町は隣接していたからか親しくなあって、山高の文化祭の美術展を二人で見に行ったり、大学本館の正面玄関にある階段で、じゃんけんしては上ったり下ったり、負けて鯛い焼きをおごったりと、たわいない遊びをしていた。彼女は他の女子とは交わらないようだった。その誠ちゃんがなんと30号の人物画を出していた。いつ

の間にとびつくりした。もっと驚ろいたのは、卒業して間もなくだったか定かではないが、昔の山田駅（伊勢市駅）の外官の通りにあった商陳（空襲で焼け残った鉄筋のビルで商工会議所の物か）で彼女が個展を開いたことである。30号、50号の大作が多数あり、黄橙、緑の暖かく柔らかな色彩は、優しく人を包むようであった。いつの間にこんなに描いていたのだろう。聞いてみたが、要領を得なかった。結婚後、彼女は自宅の焼きがまで御主人と焼き物を作っていた。その焼き物の童女の人形が県展で特選になった。愛くるしい童女の柔らかな表情は、彼女の油絵と共通する温かさを感じる。

美術展の皆の力作を觀賞して帰かけた時、美術部の上級生に呼び止められた。「高橋さん、あんたは展示の準備に全然来んだね、会計係りのくせに、どういうつもりかね、それに会計の仕事も全部、書記の川村さんが一人でやって大変だったん知ってますか」と恐い顔で憤慨している。私はきょとんと黙っていた。そう言えば四月に奥さんが私を会計に推選し皆が拍手して決まった事は覚えていた。単に形式的な役かと思っていたのだ。

さっそく四年生の川村守一さんに謝った。「いいよ、気にしなくても、この後も僕がするから」と優しく言っ

てくれて胸をなで下した。会計は、美術展のパンフレット代や資金を集める為、画材店や喫茶店などを回って協賛してもらい、パンフレットに店の広告を出すらしい。厚かましい話だと後年、思ったのだけど、私は呑気で、ずれている所があるのだろう。一度、女の人に「あんたにはあきれるわ、人が傷つくような事を平気で言うから。他の人なら絶対許せんけど、あんたは許せる気になるわ、あんたは徳人（得人）やね」と言われた。気付かないうちに人を不快にする事を言うらしい。故意ではないが、傷ついたなら済みませんと心から詫びたい。

川村さんは一度、私の留守に来てくれた事があって、父は好感のもてる青年だと言っていたが、何の用だったか、留守でごめんと連絡も何もしなかった。用事があるなら、又、連絡があるだろうと思っただけで終わってしまった。川村さんは高校の教員の時、伊勢の河崎にある川辺に建つ家を描いていた。その作品が日展に入選した。私は名古屋の日展でその水彩画をみた。真面目で努力家で優しい人柄が出ていると思った。美術展の後の会計の仕事は多分、収支の報告書づくりもあったのだろうが、私は気付かなかった。展示品の後片付けだけは行こうと出向いた。

そこで書道部の部長の広さんと知り合った。彼も小俣に住んでいたのも、その後もバス停で出会う事もあり、立ち話をする事もあった。

広さんの作品が日展の書道の部で入選した。絵と違って、失敗しても塗り重ねるわけにはいかない。書き損じたら反古になる。同じ文字を一年練習してやっと完成する事など話してくれた。書道も大変だと思った。私の息子の一洋（ひとひろ）が山高の三年生になった時の学級担任が広先生だった。父兄会の進学相談会でも、コピーを入れてもらって長々と雑談した。廊下を出ると、奥さんと出会った。「息子が一年生の時、奥さんの美術とつたのよ」と話すと、「なんで知らせてくれんだ」と言っていたが、彼は気軽に話しかけられない雰囲気からあったからとは言わず、二人は並んで窓から校庭を眺めていた。広さんが山高から伊勢高に転勤してきた年、偶然にも二年生の長女の学級担任をしてもらった。何か縁があった。――奥さんも広さんも亡くなって久しい。

誰でも同じ出身校と聞くと、懐かしく親しみを覚えるものだ。学問や研究は勿論大切な事だが、それ以上に、学生時代の人とのつながりは大事だと思う。社会に出てからも、助けたり、助けられる事が多々あり有難いと思

う。図書館長だった中野さんにも次男の事で助けられる事があり感謝している。葉っぱの会の友達にも色々の事を心配してもらって心の支えになっている。有難いと思っている。

兄は三重大と無関係だが、二十代の頃、足代先生の開いていた絵の塾に参加していた。兄の友人、絵の仲間の人達も、私も一緒に行つてモデルさんをデッサンしたり絵にしていた。私は長男を出産してからは絵を描かなくなっていた。しかし兄は現在も指導や制作をしている。足代先生がお亡くなりになる迄は、奥さん、川村さん達と兄は、足代先生のお供をして酒をよく飲んでいた。平成二十六年には、兄も川村さんも個展を開いて、兄弟のように仲良くしている。うれしい事である。

ストーカーに悩むの巻

次に私がストーカーに―えっ―と思うでしょう。平凡な私に？信じられない話、相手がどんな性格で、どんな事を考えている人か分らないのに、好きだと言って、執拗に追い回すなんて気が知れないと思う。

ノキさんが茶道を子供の時からしていたので私も茶道・華道クラブに入る事にした。日本人の教養として必要だとも思った。

ノキさんより早く、帰りの汽車に間に合うよう茶道の会が終ると、本館のすぐ後に建つ和室の独立した家屋を出て、本館を通り抜け校門を出ようとした。すると見慣れない小柄な学生に声をかけられた。話しがあると言うので、つきり誰かの伝言かと思つた。「何の用事です、か、汽車の時刻があるので早く言つて下さい」と言つたが「いや、ここでは一寸まずいので」と先に校門を出て津駅の方へ歩き出す。仕方なく付いて行く。途中、道の反対側を指さして「あそこに、一緒にボーイスカウトをやっている友達がいるんですよ。彼は女の子を連れこんだりするけど、僕はそんな事は絶対しません」と言う。不良仲間かと薄気味悪く感じた。「用事がないなら失礼します」と言うたび「つい、そこまでですから」とずん／＼歩いて津駅裏の偕楽公園に入っていく。

公園の右に見慣れた博物館がある。県の美術展には何度もそこへみに来ていたので親しみのある場所だった。彼は左の公園の奥へと進む、丘が公園になっていて小道は高低の坂道が続いている。大木はなく、若い木々が茂っている。夏休みの暑い日中で、人の姿は全くなく静かである。とうとう一番奥まで来てしまった。奥の斜面には家が建っている。家並みも続いている。あれは、母と訪

れた荒井先生の家だ。何かほっとする。結局、何を言うのかと思ったら「好きです、おつき合いて下さい」という言葉。阿呆らしい、二、三十分も歩かせて、そんな話なんだ。「おことわりします」と言うなり、一目散に公園の入口に走った。暴漢だったら、ひどい目に合っていたかも知れないと恐くなった。予定の汽車には乗れず、服装はきちんとしていたけど、見知らぬ学生についていく愚かさに自分自身腹が立って仕方なかった。帰宅しても心配かけると思って両親には話さなかった。

それからである。社会科専攻のI君が私の受講している国語の授業に来て後に座っていたり、図書館でも読書していて、ふと顔を上げると、同じテーブルの前に座ってじっと見ている。ぞっとして逃げる。それで廊下を歩くのも恐れて、ノキさんとトイレから出てくると入口にIが立っていた。ノキさんとトイレから出てくると入口にIが立っていて、封筒を渡された。彼は弁論文の部長とかで、東海弁論大会で優勝したとの事。優勝カップを抱えている写真が入っていた。ピーアールかしら、手紙には誤字が三カ所あった。赤ペンを入れて、腹いせに、女子控え室の壁に張った。「そこ迄せんでも…」とタネちゃんだったか言ったので、その日のうちに取りはずした。

ある日、津まで奥野さんとおしゃべりして津駅で別れた。プラットホームに入って、ふと後の方を見る。Iが改札口に来ていいる。とっさに陸橋の階段裏に息をひそめて隠れた。列車は出てしまった。プラットホームをうろうろ捜し回っていたIは居ない。恐くてノキさんの下宿に行き泊めてもらった。暫くして手紙が来た。「あの日、Iは一時間も汽車に乗って、列車中を捜しても私が居ないので、私の降車する宮川駅に降り、とう／＼新出の家の前に来て、最終列車まで待っていたとか。寒くて、身体が冷えて痔になって今、寝ている」とあった。安珍清姫じゃないけれど、蛇のような執念に恐さが増した。しかも痔だなんて、恥ずかしい言葉をよく書けたものだ、デリカシーのない人だと思った。

どうしたらストーカー行為を止めてもらえるか思案した。彼は三重大学の講堂で東海大会の時の弁論を生徒会行事の一環か定かではないが全校生徒に聞かせた。今までのゆっくり聞かす話し方ではなく、息もつかない立て板に水のような早口で何だったかしやべった。とても人の胸を打つ感動的な迫力のある話し方ではなかった。一寸めずらしい話術と思われる優勝したのではないかと思っただけだ。彼は自分の顔が学校内で知られている有名人と

思っている。權威に弱いタイプに違いないと踏んで、私は「これ以上、つきまとうなら学長先生に訴えます」と手紙を送った。効果てき面「断念します」と返事が来た。その文末に「私はそんな事はしません、男が恋する女に振られて殺す心境がよく分ります、袋を無理に頭から被された心境です」とあって、更に恐ろしいと思った。それ以後、一度も彼を見た事はない。しかし、津高の時の後輩という私と同年の女の子が三人やってきて、「彼が余りに可哀いそう。もう三月も寝込んで休んでいるのよ。なんとか思い直してくれないか」と頼んできた。冗談じゃない。勝手な話だと断わって、これで終わったと思った。四月、就職して大内山中学に赴任した。すると一通の手紙が来た。「あなたの結婚相手はどんな人だろうか、私はあなたが何処に居ても見ています」と書かれていた。ハガキに自分のこと等、便りを寄こしたが放っておいた。次の年からはぶつりと音沙汰なしで、めでたく終結した。

三十五年も経った四月頃か、朝刊を見ていると、終りの版の四分の一を割いて、記事の見出しに大きく、○○○校長先生とIの名前があった。ボーイスカウトに長年尽力したその貢献と偉業に対して退職に当たり称賛の

辞を書いたものであった。休日には、ボーイスカウトに参加している、と初めての時、熱心に道中ずつと話していたような、手紙にも書いてあったような微かな記憶がある。ボーイスカウトは本物だったんだ。のめり込む性格なんだ。真面目で青春の一念な思い込みで暴走したのである。所詮、嫌いなものは仕方ないと言えるが…。

男性に鈍感だったのかー友達？

初めてのラブレター、岐阜から来ていたSさんから直接渡された。よく知らない同級生であった。「声がかじかのように美しく、うっとりする」とか「手の届かない高嶺の花」とか浮いた言葉が几帳面な小さな字で綴られていた。かじかき声はよいが蛙である。私は声もよくないし、醜い蛙に例えるなんてセンスのない人だと、すぐ断る手紙を出した。

汽車通でみかける農学部の上級生が居た。農学部は江戸橋の方に校舎があり、一般教養の時は、こちらの本校舎に來なければならなかった。Kさんは単位に必要なのか国語の授業に來るようになった。帰りは門で偶然一緒にになり二人で津駅まで歩いた。ぜんざいが好物と言ったら、津や松阪の有名な店に連れてくれて、おごってくれた。色は黒いがスマートな温和な人だった。困った事

が一つあった。植物にくわしく、道端の草花を色々説明し、その花の名前を復唱させる。今と違って若い頃の私は興味もなく覚える気もなかった。わずらわしくなつて、出会わないようにしていつの間にか疎遠になった。もう故人である。

放課後、美術室の真下の一階の彫塑室に入つてみた。人気のない寒々とした部屋には粘土の頭部の制作途中の作品が沢山あった。乾燥しないよう布がかぶせてある。そつと覗いてみると急に扉が開く音。関係のない所に無断で入つたのでどうしようかと思つた。入つて来たのは彫塑のNさん。彫塑クラブの部長で四年生だ。彼は私の五米近くに来て直立姿勢で「高橋さん、僕とつきあつて下さい」と紅潮した顔で、真剣な目をしている。柔道家のような体軀で大柄な人。文学には縁がなさそうに見える。これからも顔をよく合わす美術専攻の人だ。断るのも気まずいとし瞬のうちに考え「冗談でしょう、アハハハ」と明るく笑つた。Nさんは恥かしそうな表情でくつと踵をかえして、風のように出ていった。何か悪い気がした。冗談と取るように笑つただけであれでよかったのか、傷つけたようだ。「有難う、でも今つき合つている人がいます」と言えばよかったのか、それにしても押

しの弱い人、体は大きいのにと思つた。彼も故人である。夏休み、華道で顔見知りの松阪から来ている色白で、すまし顔の上品なTさんが声をかけて来た。「今度、鳥羽に遊びに行きません、人数が多いほど楽しいから高橋さんも」と。私は喜んで誘いにのつた。松阪のプラットホームが集合場所なので、約束の日、楽しい気分で行つてみると、Tさんが居ない。来ているのはTさんの友人で他校の男の子一人。都合が急に悪くなったさうである。もつと大勢かと思つたら相手は一人だけ。せつかく来たのだからと鳥羽へ出かけた。私は人見知りしない性だ。ど話は弾まなかつた。FはTに振られたのか元気がない。Fは小柄で色白、まるで公家さんか稚児さんを思わせる顔、華奢な身体つきだった。鳥羽の海は夏の太陽に光つてさざ波が美しい。私は「ボートに乗りたいわ」と言つた。海岸から見る岩の景色と違って、小さい岩、大きなごつごつした岩肌が迫ってくる。風も心地よく、私は、あつちへ行つて、こつちに寄せてとはしゃいでいた。どれだけか長く遊んだので、飽きてもう上がりましようとして岸へ。遅くなるといけなさと鳥羽駅にすぐ向かつた。列車に乗って向かいに坐っているFさんを見た。彼は疲れたのか表情も沈んでいる。手を痛そうにしている。私は

「手が痛い」と手の平を見た。びっくりした。両手とも真赤に皮膚が水ぶくれで、破れている。ボートは余程、力があるのだと分った。彼の華奢な白い手は無惨だった。初めてのボートでオール扱いにも不慣れだったから大変力がいった筈だ。一時間後、「ああ疲れた」とか「手に豆が出来てしまった、ほら」と見せるかすれば、中止して、何処かで休んだのに。初めての人に言えなかったのだろう。気付かない無神経な私に腹が立った事だろう「痛いでしょう、ごめんなさい」と謝った。「いいです」とは言ったが、もうこりこりに違いない。それっきり彼の消息を知らない。

小俣の宮川駅から乗るWさんと同席するようになった。無骨でおとなしそうだった。一つ上か、同じかわからなかったが、医学部の学生だった。彼は卒論がやっと出来たよと、書き上げたレポートを車中で見せてくれた。就職してからは会う事もなかった。就職から三年後の二見中に勤務している時、学校へ電話がかかってきた。Wさんから話したい事があると言う。五時前だった。「今から職員会なの、すぐ済むから、松林で待っていて」と言った。その約束をすっかり忘れて、六時頃の汽車で帰ってしまった。携帯もない時代である。Wは三時間半待つ

て来ないので帰ったとの事。伊勢市駅で津から下ってきたWと二見から帰る私はプラットホームや、汽車で宮川駅まで一緒に話すこともあったが、特に話もなく過ぎて行った。

伊勢市駅から鳥羽中へ通勤するM子さんと行き帰り、列車で出会う事があった。彼女は私の一級下で、両親はないようで、姉さんが結核とかで、長く寝ていると聞いていた。音楽専攻である彼女は、白色のスマートな美人でつんと澄まして気取ってみえた。それは学生の時と変わらなかった。

ある時、Wさんと私が駅のベンチで話していると、列車から降りたMさんが話に加わった。そしてインターン中のWに姉さんが病気なので、一度家に来て診てほしいと頼んでいた。彼は承諾した。それからはプラットホームで二人は待ち合わせて、姉さんの葉なのか、それらしい袋を手渡すのを何度か見かけた。彼女は計画的に積極的に近づいているようだった。彼らは私によそよそしくなり、出会わなくなっていくた。翌年、Wは鳥羽で医院を開いて、Mと結婚したと聞いた。風のたよりで、おとなしいと思っていたWが、小、中の校医になり、とても恐い怒る先生だと噂がながれた。奥さんのMさんは、セ

ンスのよい派手な人だとも聞いた。それ以後は何も知らない。H 26 年、M は亡くなり W は、院を息子さんに任せて、一人暮らしだそうだが定かではない。

あの時代、三重大生は地味だった。女の子も化粧したり口紅をつけ、おしゃれする事なく、みんな素颜だった。渡辺正也さんの彼女が全校で一人だけ化粧しているのを目立っていた。

私達のグループは、素顔で勉学に、アルバイトに議論するのが楽しみで、全く、恋愛に興味がなく、男の子とも友達の間でいた。私は友情は異性でも成り立つと考えている。人にもよると思うが、あの頃は、皆、話題になかったが、話題にしたら面白かっただろうに……。

それにしても、三重大の男子は紳士であつたと思う。手一つ握る事もなく礼儀正しかった。今の世相は行き過ぎていくようで、実に嘆かわしい……。

汽車通学での思い出

行きと違って帰りの列車は授業の関係もあって、一人の事が多かった。津から宮川まで一時間もあつたから、たいがい読書するか、クロッキーをしていた。斜め前に坐っている人を描く、授業中のモデルは、じっと静止してくれるが、車中の人はそうはいかない。立ち上がった

り、組んでいた足を変えたり横を向いたりする。

20 秒 30 秒で描いても全身は無理だ。寝ていると有難いのだが。中には美人なので、ついじっと眺める、失礼なとつんと怒りの表情をされる事もある。毎日描いていると早く描けるようになるから嬉しい。修学旅行の子供には喜ばれ、クロッキーのモデルになった子に記念に渡すこともある。

中学生とワイワイ言つて、同年代と思われる事があつて「何言つての、もうじき先生になるのよ」と言う事もある。東北や九州のお年寄り方言がひどく分らなかつたりする。伊勢はのんびり、おっとりした方言だと言われる事もあつた。なかなか楽しいひとときであつた。

乗り過す失敗の巻

ある日、車中で読書をしていた。相可で参宮線と紀勢線の連結の切り離しが行なわれる事がある。その時刻の列車は気を付ける必要があつた。参宮線の人は前の列車に乗り、紀勢線の人は後に乗らないと、切り離された時、逆の方向に行く恐れがあつた。私は、いつの間にかうとうと寝こんでいた。

ふと目を上げると、窓の景色が違って見える。左右の山が迫つて来ている。しまった。どうしよう。とにかく

次の阿曾駅だったかで降りる。戻る列車はないとの事、あたりは黄昏がれ暗くなってきた。終りの発車寸前の貨車が出るところだった。駅員さんが、プラットホームから外れた場所に連れていってかれて貨物列車の貨物に乗せてくれた。相可に着き、次の参宮線行きに乗り換えて、やっと宮川駅に辿りつけたのは九時頃だった。もうこりごりだと相可駅では眠らないよう気を張るようにしていた。

鉄橋を渡る

ある秋の土曜のひる下り、スケッチをしようと相可駅で下車。いつも列車から見ると川の景色は空、山、紅葉しかけた木々、ゆったり流れる川が見事な調和を示している。この美しさを描きたいと岸辺に立ったが、角度が構図的にまずい。向こう岸に渡ろうと思ったが、向こう岸に渡る橋が見えなかった。鉄橋を渡るしかない。鉄橋の枕木の間は案外幅が広い、枕木の間からは相当下の川の流れが見えている。落ちたら大変だ。恐い。一步、一步と慎重に足をくり出す。四分の一も渡っていないと思うのだが、向こう岸へ、畑から飛び出してくる農家の小父さん、小母さんが見えた。「オーイ、オーイ」と何か叫んでいる。何だろうと思った。みんな両手を振っている

が、一突然、足元の枕木が振動し、ゴウーと音がする。汽車が来ると直感した。前方は大きな崖で、カーブしているのに列車の姿は見えない。音と振動は急速に強くなっている。危ない！私は前方二カ所に突き出た柵の付いた場所があるのを目にして、全力で走った。枕木の幅の広さどころか、枕木も意識せず走って避難できる突き出た所に飛びこんだ。一瞬、背中を風と轟音が過ぎていく。長い貨車であった。もう貨車を通り過ぎた後は恐さは吹き飛び、枕木を軽く歩いた。向こう岸の小父さん、小母さんは口々に「危なかったな」、戻れ戻れと言ったのに」と叱られた。それで手を振ってくれていたのだ。風の音は鉄橋では強くて叫んでもわからなかった。列車の時刻表には、貨物の運行は揭示されていなかったし、と思った。鉄橋を渡るのがいけないなら、もっと近くに橋を作ってくれないと困ると不平が出た。スケッチはせっかく渡れたのによい構図の所はなかった。鉄橋の真中当りがいいのだが―帰りも橋は見えないし、農家の人も見えない。また鉄橋を渡って相可の駅に戻った。

大事な萬年筆をなくす

あゝ萬年筆がない、確かポケットに入れていた筈、鞆にもない。もう夕暮れが迫っている。慌てて捜しに戻っ

たが見つからなかった。

同じ年令の従姉妹のみのりちゃんに、彼女が十九才で修道院に入る事が決まって、別れの記念に岐阜から手紙と共に送られて来た大切な品。申し訳なくて、残念で、でもそれは誰にも言わなかった。代りのよく似た透明な白色に橙々色の万年筆を買ったが、矢張りどこか微妙に違っていて愛着を持てなかった。みのりちゃんのお母さん、峯子叔母さんは、岐阜の叔母ちゃんと呼ばれていた。母の妹である。御主人の須藤さんは東大の銀時計組みで、各地の農林省、県の営林署長だった。敬虔なカトリック信者で家族全員、日曜日は教会に行つてミサを受けていた。清貧な暮らしであった。書斎の四方の壁には聖書、宗教書が天井まで並べられていた。彼女の家に行った時の事、女子校から名古屋銀行に入った頃で、男の人を見るのも恐いわと言う。そんな片寄った教育では可哀いそうだと思い、小説の面白さを説いた。帰宅してから本を送つてもっと世の中を知つてと手紙を書いた。生まれた時から純粹培養された頭をそう簡単に変えられるわけ wasn't. でも私も真剣だった。

北海道の修道院には嫁入りのように一生分のお金と衣

類を持つていったそうだ。一年後私が就職したところ、彼女は派遣されドイツの修道院で老人の世話を数年も続けた。日本に帰つて北海道、東京の修道院で院長を務め、カトリックの学校の校長もしていた。叔母から二十年前に聞いた話だが、彼女は今も健在なのだろうか、きつと幸せなんだと思う。私には理解しがたい事ではあるが……。こんな社会もあるのだ。

教生実習

二年生の秋、津の橋南中学校に教生実習に行つた。一年C組の国語を担当した。毎日、教育実習ノートを記入して担当の先生に提出する。その先生は四十代か五十代か、小柄な細い方で髪を後に束ねている古風な人だった。いつも一行、結構ですとか書いてくれるだけ、張り合いが全くなかった、隣のクラスの先生のRさんに教育実習ノートをみせてもらった。彼女のノートにはびつしりと赤ペンで、カリキュラムの立て方、授業のすすめ方、板書の書き方、生徒への発問、生徒からの質問に対する取り上げ方、生徒の表情、反応、服装への目の配り方等々、実地的確な評がなされていて感服、正直、羨ましかった。私は実習の成果がえられないと思つた。指導の先生によつて大きく成果が異なるのは不公平であり、私の不運

だと思った。

夏休み、伊勢の小学校へ夏期勉強会に行つて教えた事があつた。アルバイトであるが、三、四年生の子供達は活発で可愛かつた。

橋南中の私のクラスは元気がなかつた。その時は思ひつかなかつたが、今なら先生にお願いして、放課後、おしゃべり会とか交流を持てば、もっと有益だつたと思う。自分が教職につき、教育実習生を迎えた時、自分の経験と反省が活かされたと思う。

大学に戻つてノートを提出しただけで終つたが、本当は、みんなで体験を語り、参考になる事が共有できれば成果は大きくなると思うのだが、そんな場を大学も作つて欲しかつたと思つてゐる。

おわりに

去年は「安保法」問題でデモがテレビでも放映されていた。ちょうど私達が学生の頃、明野自衛隊の成立の反対運動が起つたのを思い出した。私は地元だからと父に言われて、友人がトラックで反対運動に参加した時に行かなかつた。後で「あんた卑怯やね」と言われた。戦争は敵も味方も男も女も子供も誰も幸せにはしない。為政者の驕りを許してはならない。武力では何も解決しな

い。戦争は外交力で忍耐強く回避する努力をしなくてはいけない。今年も皆でよく考えないと大変な事になると考へている。

卒業して以来、毎年続けていた「葉っぱ」のメンバーも体調不良の人が始めて以後十数年、同窓会が途絶えている。残念なことである。二十代の頃は遠慮もなく皆でお互いの実家に遊びに行つたり、三十代には幼な子を連れて湯の山に出かけたり楽しかつた事が思ひ出される。会合の時、つい育児の事など話しかけると、種ちゃんに、「そんな次元の低い話はせんや」と言われ黙した。個々には知つていても、家庭の事情等は共有する事がなかつた。しかし、お互いの身の幸せは願つていて、支えられて来たと思う。

八十を過ぎても電話の声は、しっかりしていて、文学や哲学、社会の動きを論じられそうに思われる。もう同窓会は無理だが、一人も欠ける事なく生きている事をよしと思ひ、神に感謝したい。とにかく命あるかぎり、健康で笑つて精一杯生きたい――。